

単元目標

(関心・意欲・態度)

- ・文語詩の言葉のリズムや響きに興味をもち、繰り返し音読や朗読に取り組もうとする。

(話すこと・聞くこと)

- ・各自が思い描いた情景や作者の思いを伝え合い、想像を広げることができる。

(書くこと)

- ・思い描いた情景や作者の思いを書くことができる。

(読むこと)

- ・作品の中における個々の言葉の意味を考えながら、場面の情景や作者の思いを読むことができる。

単元について

二編の詩『はたはたのうた』『山のあなた』を教材にした単元の組み方はいろいろ考えられる。指導書の学習活動の計画には、二編の詩を1時間で読み味わい、2時間めには詩集作りや好きな詩の暗唱発表会などへ発展する指導事例が載っていて参考になる。

本実践では、『はたはたのうた』を読み味わうことに1時間、『山のあなた』を読み味わうことに1時間をあてて、発展的な学習は常時活動で補うことにした。

言葉の響きやリズムが快い詩なので、子供たちも好んで音読を繰り返す。声に出して詩を読む時間を十分に確保するとともに、そのリズムを手がかりに言葉の意味を考えていくようにした。

また、作者の深い思いが伝わってくる味わい深い詩なので、子供個々が思い描いた情景や作者の思いを語り合う場を設けることにした。特に、『山のあなた』は、暗示的象徴的な手法で心情を表した詩なので、子供たちは想像力を刺激され、作者がおかれている状況や作者が求める「幸い」について想像を広げていく。そこで、はるかかなたにある希望や願望を心に描いて、日々を生きる人間の姿をおさえたうえで、子供個々の解釈による『山のあなた』の世界を表現させることにした。

学習指導計画

時

学 習 活 動

指導上の留意点・教師の支援

- 1 『はたはたのうた』
- ・繰り返し音読する。
 - ・感想をノートに書き、紹介し合う。
 - ・最後の3行にこめられた作者の思いについて話し合う。
 - ・この詩をどのように朗読したいかをノートにまとめ、朗読する。
- ・歴史的仮名遣いについておさえる。
 - ・感想として、表現上の特色に関することと、内容に関することが出されると予想される。二つのことが混乱しないように、板書で整理するとともに、発表させる際は、話題になっていることに関連させて発言する指導を加えていく。
- 2 『山のあなた』
- ・詩を視写する。
 - ・繰り返し音読する。
 - ・言葉の意味を確認していく。
 - ・作者の思いについて話し合う。
 - ・作者のおかれている状況や作者が求める「幸」について想像し、自分なりの詩の解釈を書く。
- ・詩の現代語訳を行う過程で、子供が自分の生活の中の言葉に置き換えられない点（「幸」住む）を問題にし、話し合いを持つ。

本時の展開

* 1時間に一編の詩を読み味わう計画なので、単元の目標と変わりがない。

展開例

学 習 活 動

指導上の留意点

- ・教師の板書に合わせて、一行ずつ視写する。
- ・視写しながら発せられる子供たちのつづやきを受けとめ、全体に広げながら、ゆっくり板書していく。
- C カ・ル=ブッセさんって、どこの国の人かな。
- C なぜ「幸」は「 」がついているのかな。
- C 意味がよくわからない。
- C 「われひとと」って何？「われ」「ひとと」か。
- C さっきは「人」だったのにここは平仮名でいいのですか？
- C 最後の2行は最初の2行と少し違うだけで繰り返した。

- ・繰り返し音読する。
- ・読み方の確認をしてから個々の音読にうつる。（教師用指導書音声編を活用できる。）
- ・言葉の意味を確認する。

- T 少しずつ、皆さんが普段使っている言い方に直していきましよう。どうですか。
- C 「山の向こうの空より遠い所に『幸』が住むと人が言う」ということだと思います。
- C 「幸」ってしあわせのことだと思います。
- C でも「『幸』住む」という言い方は変だよ。
- T 視写した時に、「幸」に「 」がついている理由を探ろうとしていましたね。
- C 作者は「幸」が何なのかわかっていないのではないかな。
- C この後、わざわざ尋ねていくんだから「幸」は幸福だと知っていて、作者も欲しがっているのだと思います。
- C 「幸」を人間のようにたとえているのではないかな。
- T このあとの部分を考えていけば、「幸」についてもわかってくるかもしれませんね。中の2行について意味を考えましよう。
- C 「ああ、わたしはひとと尋ねて行って、涙ぐんで、帰ってき
- ・単に、辞書的な言葉の意味を確認するのではなく、詩における意味を確認していきたい。そこで、詩の現代語訳を行う中で、子供たちの生活の中の言葉に置き換えさせることを意図した。

た」ということです。

C つけたして、「幸」を尋ねていったのだと思います。

C 誰と一緒に尋ねていったんだろう。

T 「人」と「ひと」の違いにも視写のとき気づいていましたね。

C 今わかったのですが、平仮名の「ひと」は一緒に「幸」を探
す仲間で、漢字の「人」は「みんな」という意味だと思いま
す。

C 作者も「幸」を一緒に探しにいった「ひと」も、実際に探し
にいくほど「幸」を見つけたかったんだね。

T なぜ涙ぐんで帰ってきたのでしょうか。

C きっと見つからなかったからだと思います。

C 次の所に「山のあなたになほ遠く、『幸』住むと人のいふ」
とあります。これは、「もっと遠いところに「幸」はあると
みんなは言った」ということだから、作者たちは見つけれ
なかったのだと思います。

C 「幸」がしあわせという意味なら、しあわせは自分達でつく
っていくもので探したって見つからないのは当然だと思う。

C 作者にとっての「幸」は、自分達がどんなに頑張っても手に
入れられないものなんじゃないかな。

C 遠い所には必ずあると信じているのではないのでしょうか。

・視写の際に出
された発見や
疑問を意図的
に取り上げ、
話し合いの焦
点化を図る。

- ・作者がおかれている状況や作者が求める
「幸」について想像し、自分の解釈をノ
-トに書く。

- ・書き終わった者同士でノ-トを交換して
読み合い、感想を述べ合う。

児童のノ - ト例

【 作者のおかれている状況や、作者が求める「幸」についての想像 】

* 「幸」はどんなに努力しても手に入れられないもの、という読みが影響していると思われる例。

ぼくは、カ - ル = ブッセが求める「幸」は戦争のない、平和な世の中のような気がする。カ - ル = ブッセは、幸せになれると信じて、戦争にいったのではないだろうか。カ - ル = ブッセと一緒に、同じ村に住む仲間も戦争にいったのだと思う。でも、戦争をしたって幸せになんかなれなかった。戦争を終え、自分のふるさとに帰ってきたが、ふるさは焼け野原になっていた。それでも遠い場所には戦争のない平和な世の中があると思っている。

「幸」はどんなに探しても見つからないものだから、死のない世界ではないだろうか。死のない世界を探しても見つけれなかったカ - ル = ブッセも、一緒に探した人も、きっともう亡くなっているような気がする。でも、カ - ル = ブッセは、どうしてこのような詩を書いたのだろうか？

* 「『幸』住む」という擬人法がよく理解できず、「幸」 = 人間という解釈をした子供も多く見られた。

カ - ル = ブッセは、昔災害にあって、自分の親類が行方不明になってしまった。そして、「山のかなたの空と遠く」にある町に親類の手がかりがあるという情報が入った。つまり、カ - ル = ブッセの「幸」とは、行方不明になった親類に会うことだった。そこで、自分の兄弟と町を訪ねていった。しかし、すでに親類は亡くなっていて、ブッセは涙ぐんで帰ってきた。「山のかなたのなほ遠いところ = 天国」に「幸」 = 親類は住んでいると人々は言う。

* 「幸」が何なのか、作者も人々もよくわからずに憧れているだけではないか、という解釈も多く見られた。

山のかなたの空のもっと遠い所に「幸」が住むと人々は言う。カ-ル=ブッセさんは、親友と一緒にそれを見たいと思い、行ったのだろう。だけど、「幸」は何かわからなくて、人に聞いてもわからなくて涙ぐみながら家に帰ってきた。探しにいった「幸」が見つからなくて悲しくて涙ぐんだのかもしれないけれど、自分の町がなつかしくなって涙ぐんだのかもしれない。

授業の振り返り

作者のおかれている状況や作者が求める「幸」について勝手に想像を広げたことは、詩『山のあなた』を読み味わうことから遠ざかってしまったと反省している。暗示的・象徴的な心情の表し方をそのまま読み味わうことが重要であると考え。ただ、今回、自分の解釈を書かせたことで、個々の詩の理解がどの程度なのかはつかむことができた。また、どの言葉が読めていないのか、どの言葉にこだわっているのかも評価することができた。書く活動の内容は課題だが、書く活動を取り入れることは、読みを深め、広げるために有効であると考えている。

文語詩のリズムに関心を持った子供は多く、詩集を手取るようになった。多くの詩に触れ、音読する場を設けることは、子供の主体的な学習活動を促すと考える。